

インフラノズ超高音質盤の試聴 (1)

—種々のルートでの試聴—

1. はじめに

キングインターナショナルから 2006 年に発売された“有山麻衣子 幻のコンサート”をリメイクしたマスタークオリティの超高音質盤と称する CDR がインフラノイズから発売されました。既にディスコグラフィーのページでディスコグラフィーNo.10 として紹介しています。一部重複しますが、若干視点を変えてその音質の掘ってきたところを解明してみたいと思います。

2. 超高音質盤の由来

発売元の資料によれば、マスターは 2006 年発売のキング盤と同じですが、音質を最優先してリマスタリングしただけでなく、未編集のマスターから曲目とテイクを選択し直し、市販 CD のような量産プレスではなく一枚ごとに収録時間の 2 倍もの時間をかけて手焼きで作成された CDR ということです。このことにより、通常の CD の制作過程ではマスターの編集からプレスまでの間に起こってしまう音質の劣化を極小まで追い込み、マスタークオリティに迫ったとのこと。

この超高音質盤を実現できた理由に関してインフラノイズ社から上記以上の詳しい情報は提供されていませんので少し調べてみました。

まず、CDR の記録は、金属薄膜に塗布された有機色素の有無で反射の度合いを変化させるものです。色素に関してはシアニン系色素、アゾ系色素、フタロシアニン系色素があり、それらをレーザーで焼き切つて色素の有無で反射を判別するものです。当然、レーザーの強さの調節も色素に対応して行うことが重要となります。使用されている太陽誘電製 CDR はシアニン系色素を使用しており、耐久性には劣りレーザーに対する反応性が低いので高速な書き込みには若干問題があるとされていますが、この超高音質盤では低速で書き込んでいるとのこと。なお、書き込み速度の音質への影響については古くからいろいろ調べられています。

また、書き込み方式に関しては CLV (線速度一定) 方式と内周と外周で記録スピードを変化させることができる CAV (角速度一定) 方式あるいはそれらの複合型の方式などがあります。線速度一定と角速度一定ではヘッドのサーボのかかり方も変わってきます。インフラノイズ社では詳細を明らかにしていませんが、こういった情報からヒアリングで色素の焼き切りの時間軸のばらつきを極限まで追い込んだ条件を選択しているものと推察されます。

3. 試聴の方法と結果

試聴は 2006 年発売のキング盤 (KDC6001) と比較しながら行いました。

試聴の方法は、① EMT981 と CCV-5 経由の DAC-1 での再生の試聴、② EMT981 と CCV-5 経由の MYTEK DIGITAL 192-DSD での再生の試聴、③ ①から TASCAM DA-3000 により DSD にリアルタイム変換し、MYTEK DIGITAL 192-DSD への SDIF 伝送での試聴、④ Plextor Premium 2U で CD を再生しつつ、HQPlayer により DSD にリアルタイム変換して MYTEK DIGITAL 192-DSD 経由で試聴するという四つのルートで試聴しました。

なお、外部クロックの入力は次のとおりです。

- ① EMT981 : GPS-777 より 44.1KHz CCV-5 : GPS-777 より 96KHz
- ② EMT981 : GPS-777 より 44.1KHz CCV-5 : GPS-777 より 96KHz
MYTEK DIGITAL 192-DSD : GPS-777 より 192KHz
- ③ EMT981 : GPS-777 より 44.1KHz CCV-5 : GPS-777 より 96KHz
DA-3000 : ABS-7777 より 44.1KHz (5.6MHz DSD 設定)
MYTEK DIGITAL 192-DSD : DA-3000 より供給
- ④ MYTEK DIGITAL 192-DSD : GPS-777 より 88.2KHz (5.6MHz DSD 設定)

まず、全般を通じて、一聴して感じたことはキング盤と超高音質盤で「有山麻衣子の声が違う！」ということです。その違いはちょうど 4 月末に聴いてきたモイツァ・エルトマンのリリックソプラノの生の声とロビーで買って来た CD(UCCG-1577)との声の違いと同様です。CD の録音は 4 年前ですが、エルトマンの生の声の方がずっと若やいで透明感があるのです。また、有山麻衣子の声はノンヴィブラートと聞いていましたが、超高音質盤でははっきりと浅いヴィブラートがかかっていることが分かりました。これらから察するに「超高音質盤の方が有山麻衣子の生の声に近いのではないか！」ということです。

さらに超高音質盤では伴奏のブリュートナーの音もぼやけずに芯が通っていて響きも違います。調べてみるとブリュートナーのピアノは、高音部にアリコート (共鳴弦) と呼ばれる 4 本目の弦が張られていることが音の秘密とか。資料によれば、「通常ピアノの高音部には 3 の弦が張られているが、さらにもう 1 本、次高音部にはオクターブ上の、高音部には同音の共鳴弦が張られていて、この 4 本目の弦はハンマーに打たれることはなく、共鳴によって倍音を出すことができる。高音部のアリコート弦はダンパーで消えることもない。これにより高音部は低音部に負けない豊かな音を響かせることができる。」とあります。いくつかの資料を下記に引用しておきます。

http://bluthner.jp/about2_3.html

http://www.geocities.jp/my_bluthner24/about_Bluthner2.html

<http://casa-concetto.com/?m=wp&WID=6046>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%BC>

<http://www1.odn.ne.jp/~cbz49420/tearoom2-7txt.htm>

ブリュートナーを実際に聴いたことはありませんし、ブリュートナーの共鳴弦の構造も時代の変遷があるようで、使用されているピアノがどのようなものに該当するのか分かりませんが、聴く機会の多いスタンウェイとの高音の響き具合の違いははっきりと感じられました。いずれにしてもブリュートナーの音の特徴がキング盤より明確に捉えられているように感じられます。

さらに特筆すべきことは、①と②の PCM 再生に対して、③と④は DSD というフォーマットを通過しており、これまでオーディオ実験室のページにおいて報告してきたような DSD の優位性を結論付けてきたのですが、このことが今までほどには顕著に認識できないことです。つまり、あたかも PCM の欠点を盤の制作過程だけで解決しているかのごとく感じられることです。

最近聴くことの多くなった③を基準にすれば、①では若干 PCM の色合いが残っているという印象です。②では MYTEK DIGITAL 192-DSD に GPS-777 より 192KHz の入力を行っていますので PCM の色合いが減って見通しが良くなっています。さらに、④では、超高音質盤とキング盤の相対的な印象は変わりませんが、超高音質盤も③に比べて全体に音のフォーカスが甘めで、③を聴いてしまうと若干物足りなく感じます。③のように多重にクロックがかかかっていないことがその理由かもしれません。以上の①から④までの相違点についての記述は、この超高音質盤に限っては、いささか針小棒大に増幅した表現になっています。つまり、それほど差が縮まったということです。

また、上記に加えて下記のような再生もおこなってみました。

⑤ DA-3000 の SD メモリーへの DSF, 5.6MHz 録音からの再生

⑥ 普及クラス CD プレイヤーによる再生



CDR のストリーミング再生でのリアルタイム DSD 変換再生に対して、⑤の DA-3000 の SD メモリーに録音したものの再生は、音像のフォーカスが若干甘くなりますが、超高音質盤とキング盤の音質の違いは維持されています。

⑥では、EKJapan の TU-876CD (写真) を使用し、その出力を TASCAM DA-3000 に入力して再生しましたが、EMT981→CCV-5→DAC-1 のルートでの再生と比較して、

キング盤、超音質盤ともに EMT981 に比べて、音像がぼやけ、声や楽器の質感が低下しますが、超音質盤の方の低下の程度が小さく、十分鑑賞に耐えるレベルを維持できています。即ち、超音質盤の場合、クロック入力がない低価格の CD プレイヤーでも音質を一定程度維持できることが分かりました。

【インフラノズ超高音質盤の試聴 (2) に続く】